

Title	高鳥正夫先生
Sub Title	
Author	山本, 爲三郎(Yamamoto, Tamesaburo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2000
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.73, No.6 (2000. 6) ,p.151- 152
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	高鳥正夫先生追悼記事
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20000628-0151

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

れも東急系の大学であるが、近年、女子のみの短期大学には、その人氣が、落ち込んでいるという問題がある。先生ご自身、「私は地方の高校廻りをして、入学志望者集めをしているのですよ。」と仰ったくらいである。また工業系の大学には、その学生の多くは男子学生であるが、受験者の数学離れの問題がある。

そこで、先生は、両校を合併した新たな大学の創立にご腐心され、多忙な毎日を送られていた。ある日、東横学園女子短期大学に先生をお訪ねしたときに、先生は、とても生き生きとした様子で、このお話をしてくださった。そのお志、半ばで、逝かれたことは、先生にとつてさぞかしご無念あったと思われる。

先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。再拜

法学部教授 並木和夫

高鳥正夫先生

二十数年前、返却されたゼミのレポートには、対等の立場で議論するかのような感想が鉛筆で記載されていた。このときからかもしれない。先生についていきたいと思つたのは。つたないレポートである。ゼミの担当教員が真っ赤になるまで添削して、評価を明示してもよさそうなものである。けれども高鳥先生は、A、B、Cでランクづけすることも、ペンを使用して評価を記載することもなされなかった。先生は対等の研究者の著作物同様に扱って下さったのである。レベルは低くても、当時の私にはそれ以上のレポートは書けなかったであろう。しかし、先生の鉛筆による感想は、私の努力に対してではなく、学問研究に対する敬意からなのだと思う。法学を研究対象とすることにプライドを抱いておられるのだ。先生の姿勢は、法学研究者としての私の原点である。徒党を組むようなことが似合わないし、実際にそのようなことはなされなかった。指導している学生にご自分の仕事をさせることもほとんどなかった。お忙しい職務

も次々とご自分で的確に処理されてしまうからであるが、たとえ学生であっても一人ひとりの人間を対等の関係として尊重し、個人的な命令関係を嫌われたからであろう。議論の場でも意見の押しつけにならないように気をつけて発言されておられたように思う。逆に、私たちの方で意を尽くせないでいると、いろいろな角度から辛抱強く真意を汲み上げようとして下さった。多様な人格を独立したものとして十二分に受けとめようとなされるのである。数多く残された業績でも、この点に立脚し、見解に偏向や押しつけがなく筋を通されている。真の意味の独立自尊だと思う。

先生のお考えを辿りながら二十数年間商法を研究してきた。最新の問題を考えていても、高鳥先生はどのように問題を位置づけられるだろうか、新版会社法や会社法の諸問題を読み返してみる。自分ではずいぶん考えたつもりでいても、先生の説かれているところはなお深い。故津田利治先生は、一分野も師の教えに到達できない者は弟子とは呼べない。師の教えを次世代に伝達できないからだとおっしゃられる。私は高鳥先生の弟子だということができない。それをあえて口にする、自分の意味になつてしまう。高鳥先生の世界ではない。しかし、先生

はあるとき、人との関係は最初に出会ったときの関係で規定される旨のお話をされた。先生にとって私はいつまでも先生の学生である。うれしかった。

私が高鳥先生のゼミの現役生だった頃、ゼミ合宿でもう知っている人も少ないと思うとはかまれながら、塾の古い応援歌を歌って下さったことがある。そのときの青春の笑顔そのままのお顔にお別れを告げた。先生は、お話しされるときにまるで両手で地球を大切に包み込むかのようなしぐさをされる。私たちを見守って下さる先生は、いつまでもいつまでも青春の心を優しく表現される先生である。

法学部教授 山本爲三郎